

子どもの家事労働とジェンダー形成・人間形成

表 真 美

(教育学科助教授)

I. はじめに

家事労働とは、家庭内での生活手段の消費や家族員に対するサービスのために、社会的分業に組み込まれないで個別に行われている人間労働力の支出である(伊藤1990)。戦後の家庭生活の歴史の中で、機械化・社会化し、労働量は大きく軽減したが、依然必要不可欠な無償労働として家庭に残っている。生活的自立には家事技術の習得が求められ、家事技術の習得は家庭科教育の目的の一つとなっている。小学校における家庭科教育のもっとも基本的な内容として「家庭には自分や家族の生活を支える仕事があることが分かること」「自分の分担する仕事を工夫すること」があげられ、実践的な態度を養うことが目標となっている(文部省1998)。

1955年から1975年の「家族の戦後体制」期に夫は仕事、妻は家事・育児に専念し、子ども中心の強い情緒的な絆で結ばれたいわゆる近代家族が大衆化した(落合1997)。その後、女性の高学歴化、雇用労働化が進んでも、伝統的な性別役割規範が女性に家事・育児と仕事の二重負担を強いている。夫婦の生活時間調査によると、共働き世帯における夫の1日に家事・育児・介護等に費やす時間は21分で、妻無職世帯の夫(26分)を下回り、妻(4時間10分)と比較して著しく短いことがわかっている(総務庁1996)。わが国は、国連開発計画が算出する人間能力に関する指標であるHDIは、2003年度175ヶ国中9位だが、政治及び経済への女性の参画の程度を示すGEMでは70ヶ国中44位と低位である(UNDP2004)。女性の地位を向上し、男女共

同参画社会を実現するためには、家事分担をはじめとする家庭での男女の共同参画が不可欠であるにもかかわらず、遅々として進まないのが現状である。

一方、現代の子どもたちは、習い事・塾通いなどにより、忙しい放課後・休日を過ごしている。1993年の調査によると、小学校6年生の4割以上、中学校2年生になると約6割の子どもが学習塾に通っている(文部省1993)。小学校5・6年生が1週間に塾に通う平均日数は2.8日、小学校6年生になると週4日以上通う子どもが3割を超える(ベネッセ教育研究所1995)。また、学習塾での学習時間は、1日3時間以上が2割を超えている(日本PTA全国協議会1997)。生活体験よりも学習を重視する親の価値判断により、子どもの家事分担は軽視されがちである。近年、学校での給食や清掃の当番活動が円滑に行えないとの声も高く(AERA1998)、家庭における体験の欠如が一因と考えられる。ソウル、ロンドン、ニューヨーク、東京の小学校5年生を対象とした家庭に関する調査によると、日本の子どもの家事分担率は他の都市と比較して低く、男女差が大きい傾向にある(ベネッセ教育研究所1994)。

ところが、生活体験・自然体験・お手伝いが豊富な子どもほど、道徳観・正義感が充実するという調査結果が得られている(文部省1999)。この結果を受けて、文部省生涯教育審議会では、生涯学習審議会答申において、「生きる力」をはぐくむ方策として、「生活体験・自然体験の充実のための環境づくり」を提唱している(文部省1999)。そこで、「お手伝い・ボランティア

奨励事業」として、教育担当部署が「お手伝い帳」を配布し、家庭での子どもの家事分担を積極的に推進する自治体も出てきている（茨城県教育長生涯学習課2004）。

児童・生徒の家事労働の関する先行研究は、これまで、家庭科教育との関連から（宇佐美ほか1993，松田ほか1994），生活時間構造との関連から（堀内1991），あるいは国際比較の視点から（柳他1993）行われている。さらに，辰巳らは，中学2年生を対象とした調査により，責任ある家事労働の有無，家事労働における役立ち感や自信が，中学生のSelf-esteemに大きく影響を与えていることを明らかにした（辰巳他1999）。

家事は多種多様であり，要する技術・労働量・日常的必要度などがそれぞれ異なる。本報告では，家事の分類を行い，それぞれの家事が子どものジェンダー形成・人間形成に及ぼす影響明らかにすることを目的とする。そしてこの結果を家庭科における教育に役立てたい。

II. 方法

2003年7月に近畿圏の小学校2校・中学校3校において，自記式質問紙調査を集合法にて実施した。調査対象者は，小学校6年生119人，中学校1年生287人，中学校2年生340人，計746（男子374・女子372）人である。調査対象者の概況を表1に示す。調査内容は，1）基本属性，2）家族の状況，3）子どもの家事頻度，4）子どもの家事意識，5）子どものジェンダ

表1 調査対象者の概況

学年・性別	学年		合計(人)
	男子	女子	
小学校6年生	55	64	119
中学校1年生	144	143	287
中学校2年生	175	165	340
合計(人)	374	372	746

家族構成	家族構成			人数(%)計
	核家族	拡大家族	無回答	
	311(41.7)	432(57.9)	3(0.4)	746(100)

家族の家事分担	家族の家事分担				無回答	人数(%)計
	よくする	まあまあする	あまりしない	全くしない		
	71(9.5)	316(42.4)	285(38.2)	69(9.2)	5(0.7)	746(100)

一意識，6）子どもの人間形成についての6要素である。SPSS 調査統計ソフトを用いて分析を行った。分析の枠組みは図1に示すとおりである。家事項目は福武書店『小学生ナウ』（1984）の調査項目に準じている。因子分析に

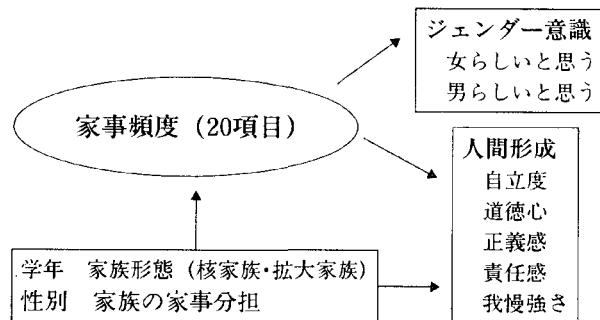


図1 分析の枠組み

より家事の分類を行った後，それぞれの家事頻度を独立変数に，子どものジェンダー意識，および人間形成を従属変数に分析を行った。

III. 結果と考察

1. 子どもの家事頻度とジェンダー意識・人間形成

1) 子どもの家事頻度

20項目のそれぞれの家事について，「毎日～週3回する」を3，「週1回～月2回する」を2，「あまりしたことがない」を1とした平均値を男女別に，女子の平均頻度が高い順にグラフに示した（図2）。T検定の結果，「共通の部屋掃除」「ゴミ出し」「トイレ掃除」の3項目以外の17項目において，女子の頻度が男子の頻度を有意に上回った。また，ボタン付け・アイロンがけのように技術を要するものや，洗濯・トイレ掃除のように労力を要する家事の頻度は下位に位置している。男女合わせて平均2以上の家事は「食器を流しに運ぶ」「自分の部屋掃除」「自分の布団をしく」の3項目のみであり，子どもたちの家事の頻度が全体的に低いことがわかる。

2) 子どものジェンダー意識

子どものジェンダー意識は，「男の子」「女の子」それぞれ日常的な行動を7項目ずつ

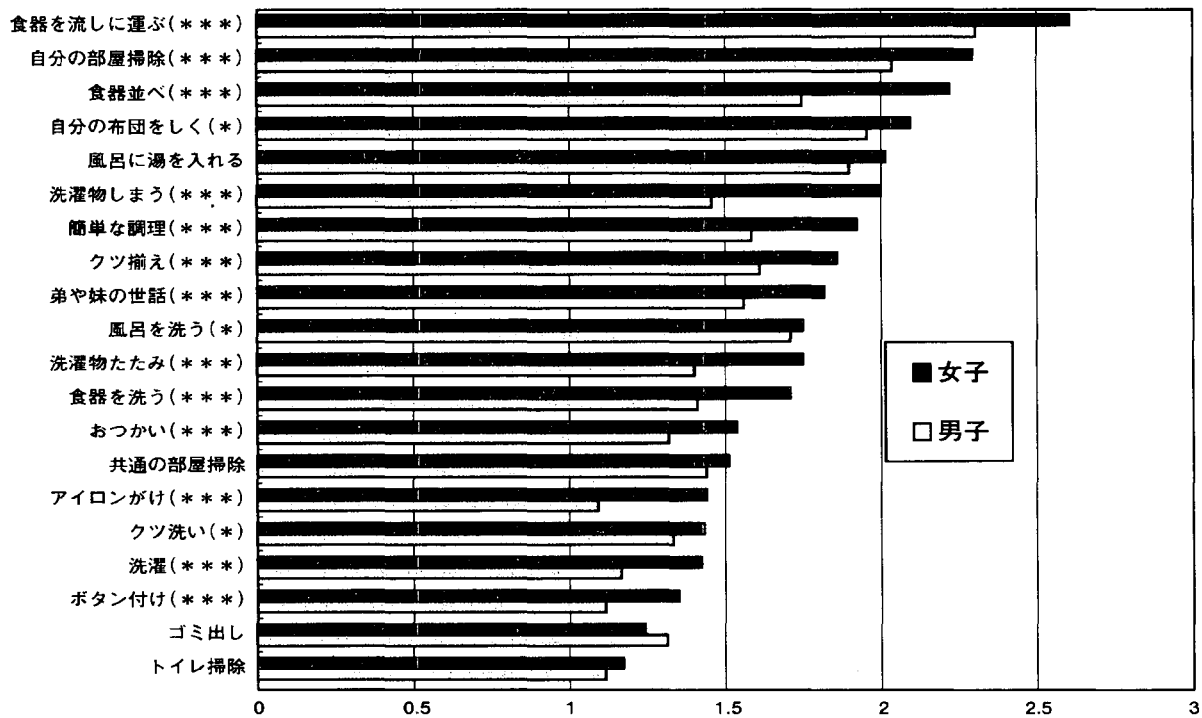


図2 子どもの家事頻度 (男女別平均値・T検定)

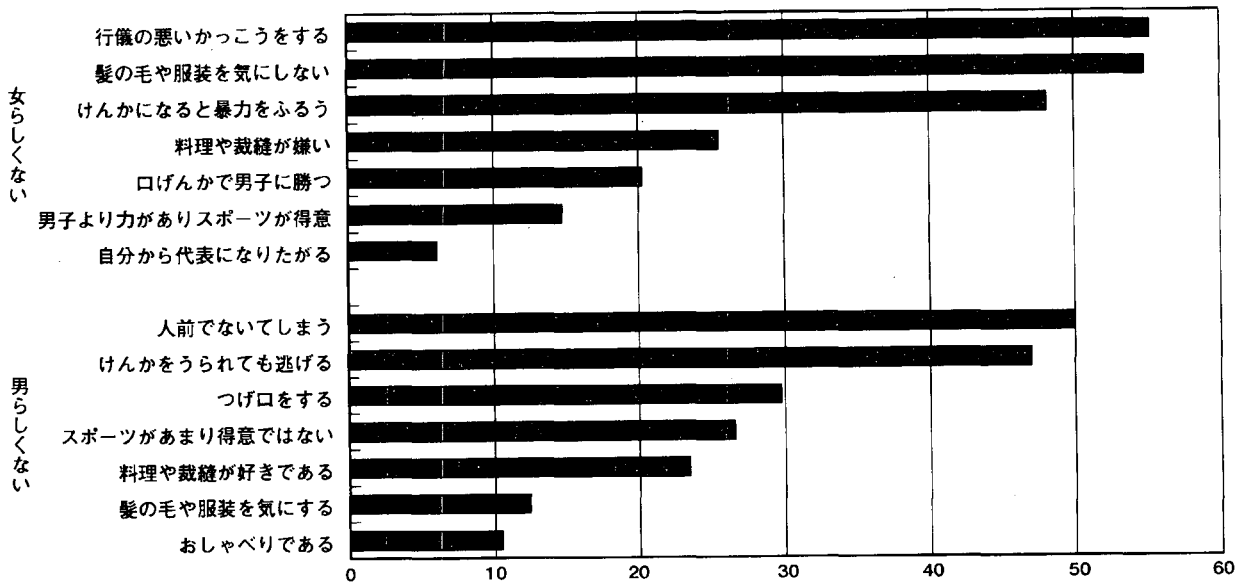


図3 子どものジェンダー意識 (%)

あげ、そのような行動をしていたらどう思うか、「女(男)らしくないと思う」「男女関係ないと思う」の2つの選択肢を用意して質問した。その結果を図3に示す。子どもの思う「女らしくない」行為は「行儀の悪いかっこうをする」「髪の毛や服装を気にしない」「けんかになると暴力をふるう」、一方「男らしくない」行為

は、「人前でないてしまう」「けんかをうられても逃げる」が上位であった。とくに「女らしくない」上位2項目は、半数以上が「女らしくないと思う」と回答していた。

この質問のほかに、「男らしい」「女らしい」イメージを12の形容詞の中から3つずつ選択する質問も行った。「男らしい」イメージで上位

に上がったのは、「勇気がある」「元気」「たくましい」で、それぞれ72.8, 65.1, 62.1%の子どもが選択した。また、「女らしい」は同様に「やさしい」「明るい」「かわいらしい」で、それぞれ78.4, 57.1, 51.8%の子どもが選択している。現代の子どもたちも典型的なジェンダーイメージを依然もつことが明らかになった。

3) 子どもの人間形成

子どもの人間形成に関しては分析の枠組みにあるように「自立度」「道徳心」「正義感」「責任感」「我慢強さ」の5種類の尺度で測定した。「自立度」は、「前の日に時間割を合わせる」「ハンカチ・ティッシュをもっていく」「持ち物に名前を書く」「寝る前の歯磨き」「朝一人で起きる」「整理整頓ができる」「自分で物事を計画し実行できる」の7項目、「道徳心」は、「お金やものの大切さがわかる」「礼儀正しくあいさつができる」「すすんで仕事や奉仕活動ができる」「困っている人を見かけたら手伝う」の4項目、正義感「決まりを守り人に迷惑をかけない」「正しいことを勇気を持って行える」の2項目、「責任感」は、「約束したことや自分の言動に責任を持つ」「皆と協力し、助け合って物事ができる」の2項目、そして「我慢強さ」は、「粘り強く物事をやり通す」「何かほしいものがあったとしても我慢できる」の2項目の質問を採用し、「きちんとできる」「だいたいできる」の2つの選択肢を用意した。自立度に関しては、4項目の質問に過半数の子どもが「きちんとできる」と答えていたが、「正しいことを勇気を持って行える」「すすんで仕事や奉仕活動ができる」と答える子どもは3割程度にとどまった。

2. 家事の分類と家事頻度に影響を及ぼす要因

1) 家事の分類

20項目の家事の頻度について因子分析を行った結果、表2に示すように、4つの因子が析出された。第1因子「簡単な調理」「共通の部屋掃除」「ゴミ出し」「洗濯」「洗濯物たたみ」「アイロンがけ」「ボタン付け」「おつかい」「トイレ掃除」を「家族のための家事」、第2因子

表2 因子分析による家事のグループ分け

		因子負荷量			
		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
家族のための家事	簡単な調理	0.354	0.324	0.217	0.123
	共通の部屋掃除	0.481	0.177	0.329	0.127
	ゴミだし	0.408	0.134	0.144	0.086
	洗濯	0.543	0.291	0.043	0.112
	洗濯物たたみ	0.481	0.475	0.145	0.146
	アイロンがけ	0.584	0.211	0.179	0.075
	ボタン付け	0.356	0.05	0.075	0.06
	おつかい	0.358	0.196	0.198	0.122
	トイレ掃除	0.542	0	0.164	0.189
補助的な家事	食器並べ	0.186	0.605	0.13	0.225
	食器を流しに運ぶ	0.004	0.477	0.259	0.159
	食器を洗う	0.402	0.435	0.134	0.18
	洗濯物しまう	0.31	0.462	0.267	0.056
自め自分の家事	クツをそろえる	0.299	0.342	0.366	0.044
	自分の布団をしく	0.174	0.204	0.49	0.097
	自分の部屋掃除	0.203	0.138	0.631	0.106
お風呂関連家事	風呂に湯をいれる	0.188	0.279	0.137	0.655
	風呂を洗う	0.235	0.159	0.133	0.74

主因子法により因子抽出
Kaiserの正規化をとみなわないバリマックス法により回転
7回の反復で回転が収束

「食器並べ」「食器を流しに運ぶ」「食器を洗う」「洗濯物をしまう」を「補助的な家事」、第3因子「クツをそろえる」「自分の布団をしく」「自分の部屋掃除」を「自分のための家事」、第4因子「風呂に湯をいれる」「風呂をあらう」を「お風呂関連の家事」と命名し、これら4つに分類された家事の頻度得点とジェンダー形成、人間形成との関連を分析した。

2) 家事頻度に影響を及ぼす要因

子どもの学年・性別・家族の状況と4つの家事頻度得点との関連について、 χ^2 二乗検定法によるクロス検定分析を行った。その結果を表3に示す。家族のための家事は学年が進むに従

表3 子どもの学年・性別・家族の状況と4つの家事頻度得点との関連

	家事頻度			
	家族のための家事	補助的な家事	自分のための家事	風呂関連の家事
学年	***			
性別	***	***		*
家族形態				***
家事分担	***	***	***	***

*** : $p < 0.01$ ** : $0 < p < 0.01$ * : $0.01 < p < 0.05$

って頻度が減少する傾向にある。自分のための家事を除いて、男子よりも女子のほうが頻度が高い。お風呂関連の家事は、拡大家族よりも核家族の子どもの方が多く行っている。さらに、家族の家事分担はいずれの家事にも影響を及ぼし、分担を多く行っている家族をもつ子どもは、家事の頻度が顕著に高くなった。

3. 家事頻度が子どものジェンダー形成に及ぼす影響

4つの家事頻度得点を上位群・中位群・下位群に3分割した変数を独立変数に、前述のジェンダー意識に関する質問のうち、「男(女)らしくないと思う」と回答した個数の多い者から上位群・中位群・下位群に分割した変数を従属変数として、 χ^2 二乗検定法によるクロス検定集計を行った結果、「家族のための家事」に関連が認められた。図4に示したように、家事頻度上位群と下位群を比較すると上位群にジェンダー意識が強い者が少なく、ジェンダー意識が弱いものが多い一方、家事頻度が低いグループはジェンダー意識が強い者が多いことが明らかである。

4. 家事頻度が子どもの人間形成に及ぼす影響

4つの家事頻度得点を上位群・中位群・下位群に3分割した変数を独立変数に、前述した「自立度」「道徳心」「責任感」「正義感」「我慢強さ」それぞれ合計点の高い者から上位群・中位群・下位群に3分割した変数を従属変数として、 χ^2 二乗検定法によるクロス検定集計を行

った。両者の関連の結果を表4にまとめている。「家族のための家事」は、5変数すべてと関連が見られた。次いで関連が見られたのは「風呂

表4 家事頻度と人間形成との関連

	人間形成				
	自立度	道徳心	責任感	正義感	我慢強さ
家族のための家事	***	***	**	**	***
補助的な家事	***	***			**
自分のための家事		*			
風呂関連の家事	*	***	**		**

*** : $p < 0.01$ ** : $0 < p < 0.01$ * : $0.01 < p < 0.05$

関連の家事」であり、「自分のための家事」は「道徳心」との関連のみしか認められなかった。関連が見られたすべてにおいて、家事頻度が高い者ほど、人間形成が良好である結果であった。家事労働は自立度、責任感を高めることはもとより、道徳心、正義感を高めることが今回の調査でも明らかになった。とくに「家族のための家事」が影響を及ぼしたのは、自分以外の人のための労働が、子どもの情操面に影響を与えるためであろう。また、家事労働は家族と子どものコミュニケーションの場となり得る。家事分担によって、親子の触れ合いが増した結果、子どもの人間形成にも影響があったと考えられる。

さらに、子どもの人間形成には、家事以外の要因が影響を及ぼすことも考えられる。したがって、4つの家事頻度得点、および学年・性別・家族構成・家族の家事分担を独立変数に、それぞれの人間形成の5変数を従属変数に重回帰分析を行った結果、人間形成の5変数いずれ

も有効な回帰式が得られた。結果を表5に示す。自立度は、自分のための家事頻度が高いほど、学年が低いほど、家族のための家事頻度が高いほど、高くなる。道徳心は、家族のための家事頻度が

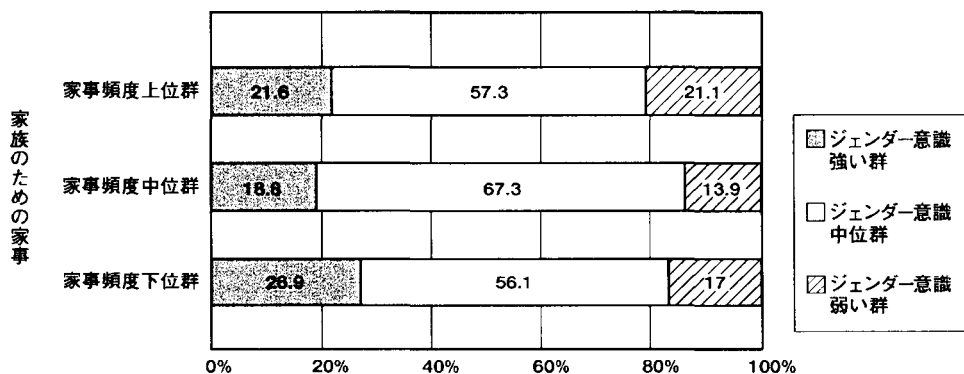


図4 家族のための家事頻度別ジェンダー意識 (p=0.027)

表5 家事労働・家族の状況が子どもの人間形成に及ぼす影響

	人間形成				
	自立度	道徳心	責任感	正義感	我慢強さ
	β				
家族のための家事	0.164**	0.165**	0.131*	0.16**	0.072
補助的な家事	-0.065	0.064	0.008	0.082	0.047
自分のための家事	0.251***	0.127**	0.019	0.061	0.118*
風呂関連の家事	-0.027	0.074	0.1*	0.01	0.052
学年	0.216***	0.123**	0.105**	0.153***	0.088*
性別	-0.077	0.077	0.014	0.156***	0.112**
家族構成	-0.014	-0.075*	0.002	-0.037	-0.049
家族の家事分担	-0.044	-0.05	0.006	-0.088*	0.026
As-R2乗	0.153	0.119	0.048	0.08	0.057

高いほど、自分のための家事頻度が高いほど、学年が低いほど、核家族の方が高くなる。責任感、家族のための家事頻度が高いほど、学年が低いほど、風呂関連の家事頻度が高いほど、高くなる。正義感、家族のための家事頻度が高いほど、男子の方が、学年が低いほど、家族が家事分担をしないほうが、高くなる。我慢強さは、自分のための家事頻度が高いほど、男子の方が、学年が低いほど、高くなる。自立度には「自分のための家事」が大きく影響したのとはうなずける結果である。さらに、「道徳心」、「責任感」、「正義感」には、「家族のための家事」が大きくプラスの影響を及ぼしていることが明らかになり、今後の家庭科の指導にも反映させるべきと考える。

IV. 結果のまとめと今後の課題

子どもの家事頻度とジェンダー形成・人間形成との関連を明らかにするために、2003年7月に小学校6年生、中学校1・2年生746人を対象に質問紙調査を行った。調査により得られた知見は以下の3点に要約できる。1) 具体的な家事労働20項目を挙げ、「あまりしない」「週1回～月回」「毎日～週3回」の3つの選択肢を設けて頻度を尋ねた調査では、全体的に頻度が低く、技術を要する家事を行う子どもは少なかった。17項目において男子より女子の方が有意に頻度が高かった。家事項目は因子分析により4因子に分かれた。2) 「行儀の悪いかっこうをする」「髪の毛や服装を気にしない」女の子

は、「女らしくない」と回答する子どもが半数を超えた。

「人前で泣いてしまう」「けんかをうられても逃げる」ことを男らしくないとする子どもも半数近くいた。学年が下がるにつれて、拡大家族より核家族の方が、家族が家事分担を行っている家庭ほど、子どもの家事頻度が高かった。

3) 「家族のための家事」頻度の高い子どもは、ジェンダー

・バイアスをもつ割合が低かった。4) また、「家族のための家事」頻度の高い子どもは、自立度、道徳心、責任感、正義感、我慢強さいずれも高得点であった。重回帰分析からも、とくに家族のための家事は、人間形成にも大きな影響を及ぼすことが明らかになった。

子ども、とくに男子の家事分担率は低く、子どもたちは依然固定的なジェンダー意識をもっている。しかし、家族のための家事をする子どもはジェンダーバイアスをもつ割合が低いこと、また、家事分担は子どもの人間形成に少なからずよい影響を及ぼす可能性があることが明らかとなった。自分のためだけでなく、自分以外の人のために働く家事分担は、奉仕活動の原点である。子どもの健全育成のために、あるいは男女共同参画社会の実現のためにも必要不可欠である。今後も幅広い年齢層における家事分担に関する調査を続けるとともに、家庭科教育、あるいは社会教育を通して、家事分担を進める具体的方策を考えたい。

謝辞

今回の調査にあたっては、三重県小学校教諭林麻衣子さんに多大な協力を得ました。ここに厚く感謝申し上げます。

参考文献

- 伊藤セツ「家事労働の定義」『家政学事典』朝倉書店 p.195 (1990)
- 文部省『小学校学習指導要領』(1999)

落合恵美子『21世紀家族へ 家族の戦後体制の見
かた・超えかた』有斐閣 (1997)
総務庁『社会生活基本調査』(1996)
UNDP 連合開発計画 <http://www.undp.org/>
文部省『学習塾等に関する実態調査』(1993)
ベネッセ教育研究所『モノグラフ・小学生ナウ
Vol.15-6』(1995)
日本PTA全国協議会『学習塾に関するアンケー
ト調査報告書』(1997)
「家事しない子供たち—雑巾さわらず足でふく/
教室の掃除に「いくらくれる」』AERA Vol.11
No.40 p.6-8 (1998)
ベネッセ教育研究所『第4回国際比較調査・家族
の中の子どもたち モノグラフ・小学生ナウ
Vol.14-4』(1994)
文部省『子どもの体験活動等に関するアンケート
調査』(1999)
文部省生涯学習審議会答申『生活体験・自然体験
が日本の子どもの心をはぐくむ—「青少年の
[生きる力]をはぐくむ地域社会の環境の充実
方策について」—』(1999)
茨城県県政クローズアップ「お手伝い・ボランテ

ィア奨励事業」
<http://www.pref.ibaraki.jp/closeup/>
宇佐美佳枝・菊池るみ子・深田祐規子「小学校に
おける家庭科教育の意義—児童の家事参加に関
する調査を通して—」『高知大学教育学部研究
報告第1部』第46号 p.128-138 (1993)
松田歌子・関口紀子・西出伸子「小学生の家事
手伝い〈第1報〉食生活領域」『文教大学教育
研究所紀要』第3号 p.52-59 (1994)
堀内かおる「児童・生徒の生活時間構造と家事労
働参加—東京都世田谷区在住児童・生徒の調査
をもとに」『昭和女子大学大学院生活機構研究
科紀要』Vol.1 p.99-110 (1991)
Masako Yanagi, Cristina M Contreras
“Childre's Participation in Household Task-
sin Fukuoka and Mnila”『福岡教育大学紀要
第5分冊』第42号 p.95-115 (1993)
辰巳理恵子・木田淳子「中学生の家事労働と
self-esteem」『生活文化研究』Vol.39 p.1-
28 (1999)
福武書店教育研究所『モノグラフ・小学生ナウ
手伝い Vol.4-5』(1984)